

平成30（2018）年度
東京大学大学院学際情報学府学際情報学専攻
修士課程（文化・人間情報学コース）
入学試験問題
専 門 科 目

（平成29年8月21日 14：00～16：00）

試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。開始の合図があるまで、下記の注意事項をよく読んでください。

1. 本冊子は、文化・人間情報学コースの受験者のためのものである。
2. 本冊子の本文は7ページである。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあった場合には申し出ること。
3. 解答用紙1枚を使うこと。裏面を使ってもよい。このほかにメモ用紙が1枚ある。
4. 解答用紙の上方の欄に、受験番号を必ず記入すること。受験番号を記入していない解答は無効とする。
5. 解答には必ず黒色鉛筆（または黒色シャープペンシル）を使用すること。
6. 日本語で答えること。
7. 試験開始後は、中途退場を認めない。
8. 本冊子、解答用紙、メモ用紙は持ち帰ってはならない。
9. 次の欄に受験番号と氏名を記入せよ。

受験番号	
氏 名	

文化・人間情報学 問題

次の (A) (B) 2つの文章は、社会学者の鶴見和子と免疫学者の多田富雄による往復書簡からの抜粋である。これらの文章を読み、問1から問4までの設問に、問いの番号（問1から問4まで）をつけて日本語で答えなさい。問題全体（問1から問4まで）で解答用紙1枚を使いなさい。ただし裏面を使ってもよい。

(A)

私はうかがいたいことがあるのです。つまり、「階層性」そしてそれを「超越する原理」——上の階層に行ったときに新しい原理を発見するあるいは創造する——そういうことを多田さんは述べてらっしゃるんですけども、そういうときに、下の階層のスーパーシステムの間に関係性の原理と、その上の階層のスーパーシステムの説明原理と、どのようにつながるのか。つまり、私は社会変動と個人の変化の結節点、結び目はどこにあるのか、どういう関係があるのか、生物学ではどういう関係があるのか、ということを知りたいんです。

南方曼荼羅流に言えば「萃点（すいてん）」です。あらゆるものがそこで最も多く出会う場、それは何なのか、ということを考えてみますと、私はやはり個人に帰るのではないかと考えます。たとえば、生きている個体、個体の体の中で免疫の活動とか、生きるとか死ぬとかが起こっている。その次の階層の、個人がいつしよになっている社会の変動を、個人の説明原理で説明することはできない。これは社会学ではっきり言われていることです。そこで社会の変動と個人の変化との結び目は何かというと、いま申し上げましたように、社会学では私の知っているかぎりでは、このようにデュルケームからリースマンに至るまで、社会のタイポロジーと個人のタイポロジーの対応関係をみるというかたちで繋げているわけです。

個人、社会、国家、世界、宇宙と、だんだん集団が大きくなっていく、単位が大きくなっていく。そのときに、どの階層にも介在しているのは何かというと、「われ」「自己」です。免疫学でいってらっしゃる「自己とは何か」という問題に、もう一度帰ってくるのではないかと。自己がいつも介在しているんですね。個体ではもちろん自己ですし、社会の変動のなかにも自己がいるわけです。そして国家にも自己、国家と自己との関係があるわけです。そして宇宙のなかに自己がいるわけです。

(中略)

私はひとつ伺いたいことがあるのです。

自然科学と社会科学の違いなんです。それは階層が違う。上のほうにだんだん単位の大きさが大きくなっていけば、そこで関係性の新しい原理が発見される、あるいは創造される、と仰っていらっしゃいますが、その原理はひとつなんで

しょうか。それとも多様性があるのでしょうか。それを伺いたいのです。自然科学では、実験して仮説を実証することができますけれども、社会科学では実証することは非常にむずかしいのです。

それで例えば、私がいいと思っているのは南方曼荼羅の原理なんです。異なるものが異なるままに共に生きる。お互いに助け合い補い合って共に生きる関係にある。そのことによって地球の上に人類が生きながらえることができる。そういうふうに私は南方曼荼羅を現在に照らし合わせて読んでおります。

ところが現在、世界の中で進行していることは、さまざまな国がありますが、最も軍事力が強く最も経済力が強い国の統治者が、自国の文化、自国の価値観が最も優れたものだとし込んでいます。そして、それで世界中を覆ってしまおう、それに従わないものはすべて力で消してしまおう、そういう原理があって、寛容の原理と非寛容の原理が、いま世界で対立しているわけです。

私の社会学の恩師でプリンストン大学名誉教授のマリオン・リーヴィ (Marion J. Levy, Jr. 1919-2002) が言ったのは、宗教には二つの種類がある。たった一つではないんだ。ひとつは非寛容の宗教、もう一つは寛容の宗教、あるいは排他的宗教と非排他的宗教、そういうのがあると言っている。排他的宗教が宗教の唯一のかたちだと今まで考えられてきたけれど、そうではないのだと言っているんです。

排他的宗教とは何かというと、ひとつの神を信じたら、その他の神を同時に信じることは偽善であり間違いであると考えた宗教。その典型は、キリスト教とイスラム教であるといったんです。それに対して、一つの神を自分が信じて、他の神を同時に信じて差支えないと、そういうふうに考える宗教が寛容宗教、非排他的宗教。その実例はたとえば日本の神道とか仏教とか、ジャイナ教とか道教とか、アジアの宗教のなかにはそのような宗教がたくさんある。両方とも宗教と呼ぶことができるのだというふうにいったんですけど、そういうふうに原理が対立する。原理は一つではない。対立したときにどうやって決めるかということね、社会科学では実験室で決めるわけにはいかないの、力でねじ伏せるというような状況に今なっております。

それで、異なるものが異なるままに共に生きるということに、私は賭けております。しかし、それは、社会科学においては唯一の原理とは言えない、それは価値観の問題だということになりますと、何で決めるかという決め手がなくなるんです。

そのことが自然科学と社会科学とのあいだの違いではないのか。

そのことをどういうふうにお考えになりますか。教えていただきたいと思いません。

それから、最初に申し上げました共に生きる途を拓くということは苦しみ、悲しみの共有ということではないか、それはまた自己の感覚の問題になって参りま

す。

あまり先まで行ってしまうとおかしいことになりますが、今西錦司さんは、デカルト批判のなかでこう仰っています。「われ思う、ゆえにわれあり」と言ったデカルトは間違っている。これが二元論のはじまりである。言語体系をもっていなければ「思う」ことはできない、考えることはできない。そうすると言語体系をもつ生きものともたない生きもの、もつものともたないものの二元論になる。そして人間だけが言語をもっているということになると、人間が一番えらいということになって、人間とその他の生物あるいは無生物とは全然ちがうものだということになります。

これに対して、これとまったく同じようなことをオランダの気象学者が言っているのに私はびっくりしました。テナカスさんという王立気象台の幹部です。その気象学者が書いている論文によれば、手を机にぶつければ「あ、痛い」と感じる、「われ感じる、ゆえにわれあり」——「われ思う」ではなくて「われ感じる」というふうにデカルトを直せば、これは二元論ではなくなる。そうすると、南方や私の考えに非常に近くなります。

「感じる」ということは、たとえばお能を観て感動する、『望恨歌』を観て非常に感動した観衆が、なるほど、こちらがやったことが向こうの人びとに対してそれだけの苦しみを味わわせていたのか、ということを感じれば、今の拉致問題に対する考え方、そして国際関係についての考えも、変わってくるんじゃないでしょうか。

（「自己と創造性——多田富雄さんへ（2002. 12. 1）」、多田富雄・鶴見和子『邂逅』2003年、藤原書店）

(B)

今回の鶴見さんのお手紙は、期せずして社会学と自然科学の方法論の比較になっていることに気付かされます。ご質問は、鋭く本質を突き、もとより浅学の私のが的確に答えられる筈はありませんが、いいチャンスですから、胸をお借りするつもりで考えて見ようと思います。

まず自然科学は、基本的に還元主義に基礎をおいています。上の階層の現象を、その下の階層のルールだけで説明しようとしています。体のことは細胞で、細胞のことは分子や遺伝子で、という具合に還元してゆく。だから、生物学の現象では、上の階層の持つ目的や意思は対象にしないのです。事物は下位のルールどおりに動く。

もともと生物学が言及できる対象は、全部結果だけです。目的や意思は問題にしないから、結果だけしか相手にしない。①自然科学には、What? や When? Where? How? などの問いはあるけれども、Why? という問いかけはないといわれています。実験室で実証できるのはそこまでだからです。

(中略)

よく知られたことですが、キリンの首は高い枝になっている果物を食べる目的で長くなったのではなく、偶然の進化の結果として長くなったという論理に過ぎません。進化は偶然の変異とその選択によるものです。その偶然の変化（突然変異）と選択（淘汰）のメカニズムを、価値判断なしに解いてゆくの生物学ですね。

よく分かりませんが、社会学では自由意志を持った人間という生物が、特定の意思や動機を持って集団の中で行動を起こす。それが多様な個別的結果を生み、その人間の生きる社会にもひとつの志向をもった変化をもたらす。その関係を調べるというのが研究対象のひとつではないでしょうか。鶴見さんの「社会変動と個人」はそういう立場から書かれているように見えます。

だから階層が変わっても、お互いの関係性を問うことが出来る。お便りにあった「自殺」の問題も、個人の行動と社会の変動を関係付けて解析できるのではないのでしょうか。

アポトーシスという細胞の自殺は、発生の途中で要らない細胞が自ら死んで形が作られたり、免疫系が自分を害する細胞を除去したり、古い細胞を新しい細胞に入れ替えたりするのに大切な死の現象です。アポトーシスを人為的に止めてしまうと、発生も出来なければ、生き延びることさえ出来ないのです。

しかしこんな大事な現象も、決して個体の生存という目的で起こるというわけではない。時には個体に死を招くこともある、危険な現象でもあります。キリンの首と同じで、単に偶然の産物です。それが偶然利用されたために生き残ったに過ぎません。個体の生存と、遺伝子のレーゾンデートルとは無関係とっていい

のです。下位の細胞の行為と、上位にある個体の運命とは、関係ないということです。行為のタイポロジーそのものが成り立たないのです。

オーソドックスな生物学者は、結果としての細胞死メカニズム (How) だけを探求しようとしているのです。なぜ (Why) 自殺するかということには関知しない。それが自然科学の立場なのです。

社会学は、なぜそうなったかを問う学問です。だから個人の自殺という下の階層の現象が、上位の社会という階層の現象にどう反映しているか、あるいは社会にどう影響されているかを研究対象とすることが出来るのではないのでしょうか。

しかし生物学者だって、いつまでもそんな古風な還元主義的なことばかり言っていないでください。それぞれ対象としている階層の現象を記述するだけでは生命という全体の理解には近づけない。私のやり方は、二つ以上の異なった階層の現象を並列的に比較して、共通点や相違点を発見し、階層を超えることによって生じる不連続な変化、つまり新たに発明された原理を探するという方法です。それによってスーパーシステムが、何を創造したかを発見しようというのです。

たとえば、遺伝子の階層とゲノムの階層を比較してみましょう。ゲノムは遺伝子記号の単なる足し算的総和ではない。ある種のコンテキストが加わって、新たな意味が生じたのです。個体も、異なった細胞の集合体ではないのはいまでもありません。階層を超えたとき何かが質的に変わる。細胞や遺伝子以上のものが見えてくるはずですよ。

個々の遺伝子では見えずに、ゲノムではじめて見えてくるものには、たとえばゲノムの完結性とか、安定性とか、新しい関係性があります。それは遺伝子を個別的に扱ってはいけません。人間はどうして人間として安定なのか、なぜサルにならないのか。人間が人間なのはなぜか。種がゲノムとして安定性をもち、完結しているからです。それはウイルスから植物、動物にいたるまで、種というものの安定している根拠です。

(中略)

もうお気づきでしょうが、この議論で私は「なぜ」の世界に踏み込んでいます。自然科学なのに目的とか、理由を問題にしている。従来生物学、いや自然科学の完全主義の掟を破って、なぜそうなるかを考えているのです。厳密な科学の則を超えて、事物の本性をたずね始めたのです。社会科学のタイポロジーのようなものには及びませんが、生命のような複雑な系を全体として理解しようとするれば、必然的にそうならざるを得ないのです。②自然科学では、異端と非難を受けるでしょう。

(中略)

もともとスーパーシステムの定義は、自ら自分を作り上げてゆくシステムです。「自己」というものを持っていることが特徴です。「自己」を守り、発展させるために、外からの情報を内部情報に変換して使い、自己言及的に変化してゆく。

その点が通常のシステムとは違う。免疫現象から導いた私の結論ですが、おなじ戦略が脳神経系や発生などの複雑な生体の仕組みにも見られます。私は『免疫の意味論』でそう主張しました。その言い方は、生物の仕組みに目的や意思を暗黙のうちに認めた言い方になっています。

私は、それが生物の仕組みのみならず、生命活動の結果必然的に生み出されるいろいろな文化現象（たとえば都市や社会の成り立ち）にも応用できると主張しました。『生命の意味論』は、そんな目的で書いたものです。そういう視点を持つことによって、自然科学と、社会学を含んだ人文科学は対話が出来ると信じたのです。そうして鶴見さんとの貴重な対話の機会が与えられたのだと思います。

（「異なった階層間の接点——鶴見和子さんへ（2003.1.3）」、多田富雄・鶴見和子『邂逅』2003年、藤原書店）

問1 問題文(A)の著者(鶴見和子)が考えている、自然科学と社会科学の違いとはどのようなものか。200字以内で説明しなさい。

問2 問題文(B)の下線部②で、著者(多田富雄)は「自然科学では、異端と非難を受けるでしょう」と述べているが、それはなぜか。その理由を200字以内で述べなさい。

問3 問題文(B)の下線部①で、著者(多田富雄)は「自然科学には、What? や When? Where? How? などの問いはあるけれども、Why? という問いかけはないといわれています」と述べている。あなたが取り組もうとしている研究計画では、What? When? Where? How? そして Why? のうち、どれを明らかにしようとしているか(複数あげてもよい)。その理由を含めて、200字以内で説明しなさい。

問4 あなたはどのように自分の研究計画に取り組もうとしているのか。問題文として取り上げた鶴見和子と多田富雄による往復書簡の文章の論点に関連付けつつ、あなたの専門分野のキーワードや理論を2つ以上交えながら説明しなさい。また、あなたの研究にはどのような学際的な視点が必要だと考えているか。他の学問分野から援用したいキーワードや理論を1つ以上交えながら説明しなさい。